南島における口承文芸〔民間説話〕の研究動向

真下　厚

（一）

奄美・沖縄地方、いわゆる南島の口承文芸〔民間説話〕について、一九八三年から一九九二年までの十年間の研究の動向について概観したい。

南島の民間説話を中心とした口承文芸の、およそ市町村を単位とした組織的調査は、一九七〇年代初めからいくつかの研究会や個人の手によって行われてきたが、それからほぼ十年を経て、順次、地域の民間説話調査報告書としてまとめられるようになってきた。福田晃・岩瀬博・遠藤庄治・山下欣一の編集による『南島昔話叢書』全十巻はその成果の一つである。これは山下や登山修を中心とする奄美地方の調査、福田・岩瀬の指導による大谷女子大学説話文学研究会の奄美・徳之島調査、福田・岩瀬・遠藤と立命館大学・大谷女子大学・沖縄国際大学の卒業生・学生による沖縄地方の合同または個別の調査、奄美沖縄民間文芸研究会の沖縄地方調査に基づくものである。一九八三年、登山編『瀬戸内町の昔話』が最初に刊行され、岩瀬他編『与那国島の昔話』が続き、その後現在までに八冊が刊行されている。この報告書は方言の語りを本文とし、共通語の厳密な対訳を掲げているところに特長がある。方言の語りの本文を中心とする昔話集は、これ以前には殆どなく、その資料の厳密さという点において画期的なものであった。また、とりわけ、沖縄地方では、市町村単位での昔話調査が行われてこなかったなかでの調査とその報告書であり、その点でも意義深いものであった。しかし、このような報告書は地域の民間説話の単なる集成ではなく、地域の伝承性についての研究の成果を示したものであることはいうまでもない。そこからは南島の民間説話伝承の特徴の一つである神話・伝説の伝承の豊かさがうかがわれよう。特に、福田他編『城辺町の昔話』（一九九一年）上下二冊は圧巻である。そこには採訪者たちが幸運にもめぐりあうことのできた当地の伝承のすぐれて豊かであった様相がとどめられている。遠藤の指導する沖縄国際大学口承文芸研究会・沖縄民話の会は沖縄本島地域の調査を主として行い、その資料は市町村の教育委員会から刊行されている。また福田の指導する立命館大学説話文学研究会は奄美大島北部・沖縄本島南部の調査を行

い、やはり、その資料は町の教育委員会などから刊行されている。岩瀬・松浪久子の指導する大谷女子大学説話文学研究会・大阪青山女子短期大学学生による合同調査が奄美喜界島を対象として行われており、まもなくその報告書が刊行されよう。

このような地域の民間説話報告書に対して、語り手個人を対象とした民間説話集もいくつか刊行されている。奄美地方では本田碩孝『吉永イクマツ嫗昔話集』（一九八四年）・同『池水ツル嫗昔話集』（一九八八年）、沖縄地方では伊芸弘子『沖縄首里の昔話』（一九九二年）がある。民間説話、とりわけ昔話は、地域のなかで伝承されてゆくものであったとともに、語り手個人の語り出すものであった。その意味で、すぐれた語り手についての報告書は大きな意義がある。特に、伊芸が取り上げた語り手小橋川共寛翁の伝承は、首里という、都または都市での民間説話の伝承という問題を考える上で、意義深いものである。この小橋川翁と交流のあった国吉瑞枝翁も、遊女街で話を語るという、特筆すべき五百話クラスの語り手であったが、その資料の早い公刊が待たれるところである。

関敬吾『沖永良部島昔話集』（一九八四年）も一人の語り手を中心に編まれたものであるが、かつて岩倉市郎によって二十年前に調査が行われて記録された語り手の話がどのように変容したかをみる。伝承の時間的変容を明らかにするものとなっている。

こうした資料の集成も、この時期、全国の資料集成の一環として行われた。『日本昔話通観　沖縄』（一九八三年）、『日本伝説大系　南島』（一九八九年）がそれである。『日本昔話通観　沖縄』は民間説話の集成となっている。

（二）

南島の民間説話の特徴は神話・伝説のきわめて豊かなことであるが、かつて山下はシャーマンの伝える呪詞と散文的な伝承とを包括するものとして「民間神話」という概念を提示した。山下は、「南島民間神話論序説」（『昔話伝説研究』第十一号　一九八五年一月）のなかで、呪詞における聖名は無から有へという存在・秩序の始源を説くことに関わり、ノロ・ユタの聖性の獲得と対応することによって、呪詞が強固に伝承されてきたと論じる。福田は「総説・民間説話」（『民間説話』一九八九年）でこの「民間神話」を民間説話の一ジャンルとし、さらに「民間神話の伝承世界」（『日本伝説大系研究編』一九八九年）において、南島の民間神話のさまざまなものが祭儀のなかから祭儀の外へと構造的に伝承されていると論じ、その大系を提示している。岩瀬は「沖縄説話」（『民間説話の研究　日本と世界』一九八七年）で沖縄地方の民間説話を対象として、真実性に傾斜する民間神話・伝説・世間話などを包含する概念として「チテーバナシ」を提示し、このような伝承の土壌の上に虚構性を楽しむ「ンカシバナシ」があるとしている。

ところで、かつて山下が奄美地方で行ったように、こうした民間神話の発生を考える上で、神役・巫者のライフ・ヒストリーや夢・憑依における幻想は重要であると思われるが、渡邊欣雄『沖縄の祭

礼』（一九八七年）・高梨一美「神に追われる女たち」（『巫と女神』一九八九年）・渋谷研「沖縄におけるノロとユタ」（『日本民俗学』一八六号　一九九一年三月）などには沖縄本島地域の神役のライフ・ヒストリーが報告されており、また松浪久子「宮古カンカカリャーの成巫譚」（『奄美沖縄民間文芸研究』一三号　一九九〇年七月）には沖縄宮古島地域の巫者の夢・憑依中の幻想についての話が報告されている。なお、松浪は「カンカカリャー〈宮古島巫覡〉の成巫譚」（『大阪青山短期大学研究紀要』一七号　一九九〇年）でこの幻想についての話を民間神話のモチーフとの関わりにおいて考察している。さらに、奄美地方では、先田光演『沖永良部島のユタ』（一九八九年）がこれまでの先田の沖永良部島呪詞を中心とする諸報告をまとめている。一方、岡本恵昭「平良市下崎・万古山御嶽道開け縁起」（『宮古研究』五号　一九八九年）・佐渡山安公「シャーマンが語る創世神話」（『奄美沖縄民間文芸研究』一三号　一九九〇年七月）は巫者に神が憑依することによって自ら語ったという創世神話の報告であって貴重である。古橋信孝「カンカカリャ（ユタ）の神話」（『物語』創刊号　一九九〇年七月）はなぜカンカカリヤがこのような話を語らねばならなかったかと問いかけ、そこに神話・物語の発生をみようとする。また、こうした巫者あるいは巫者的人物を教祖として教団が形成されることがある。そのような新宗教の神話を論じたのが島村恭則「「琉球神話」の再生」（『奄美沖縄民間文芸研究』一五号　一九九二年七月）である。一方、福田は「成巫儀礼と神口・神語り」（『口承文芸研究』一五号　一九九二年三月）で呪詞は巫者が夢・憑依中の幻想のなかで神から授けられた、または自らの口をついて発せられたとされるものであったことを示し、「日本文学の原風景」（『日本文学の原風景』一九九二年）で宮古地域における神役・巫者の親近性を手がかりに共同体祭祀の呪詞の発生を示し、文学の発生を論じている。谷川健一「南島呪謡論」（『現代詩手帖』一九八七年九月号～一九九〇年七月号、『南島文学発生論』一九九一年）も巫者の憑依・託宣に呪詞などの発生をみようとする。末次智「神謡の再生」（『説話の始原・変容』一九八八年）は、創世の呪詞の拡がりを南島・本土に認め、巫者によって呪詞が再生することに注目する。なお、真下は「沖縄説話の源流」（『昔話の発生と伝播』一九八四年）で伝播してきた神話のモチーフをいち早く受容したのがこのような巫者的な神役たちではなかったかとした。

遠藤「沖縄の来訪神伝承」（『沖縄国際大学文学部紀要』一二巻二号　一九八三年一二月）は神話と儀礼との密接な関連を説き、神話のなかの神の巡幸が島の聖地を巡るものであったことを明らかにする。また、山下「徳之島伊仙台地における説話群」（沖縄国際大学南島文化研究所『徳之島調査報告書(3)』一九八五年一一月）は自然条件を背景に民間説話と聖地との関係を軸として伝承的世界について詳述し、それを見事に浮かび上がらせている。かつて山下が指摘した、南島の民間説話の真実性への傾斜という特質からすれば、それを伝承する村落・島空間と深く結ばれねばならない。高橋一郎「「始まり」を語り継ぐシマから」（『伝説が生まれるとき』一九九一年）もこのような視点を踏まえ、さらに民俗社会・民間説話の変容

の問題へと展開させている。なお、高橋はここで取り上げている喜界島の兄妹始祖の説話群について「喜界島・手久津久集落の兄妹始祖伝承」（『奄美沖縄民間文芸研究』七号　一九八四年六月）でその伝承背景を論じている。松山光秀「コーラル文化論」（『奄美沖縄民間文芸研究』一五号　一九九二年七月）は、直接、民間説話を取り上げたものではないが、村落・島の時間・空間を人々の生活との関わりのなかで示したもので、先の視点を考える上できわめて示唆的である。また、このような視点は本土の伝説をも立体的に浮かび上がらせ、照射することになろう。畠山篤「奄美の天人女房譚」（沖縄国際大学南島文化研究所『徳之島調査報告書(4)』一九八六年三月）も主として民間説話と村落・島の空間との対応関係を示したものである。なお、先の山下「徳之島伊仙台地における説話群」では、同「与論島の伝説の様態」（『南日本文化』二四号　一九九一年八月）などとともに、民間説話の生成にシャーマンが深く関与することによって、そのダイナミズムを支えていることを論じている。

こうした民間説話と空間性の問題には、先の遠藤「沖縄の来訪神伝承」・山下「徳之島伊仙台地における説話群」がいうように、さらに儀礼が関わっている。松井健「儀礼と口承伝承」（『国立民族学博物館研究報告』別冊三号　一九八六年一一月）は宮古来間島の儀礼と口承伝承と神話空間とが対応して一体となっている構造を提示し、そこから象徴的意味を読み取ろうとする。山下「儀礼と説話」（『説話と儀礼』一九八六年）は、沖縄八重山地域の節祭マユンガナシ来訪儀礼とその由来譚とを取り上げて、民間説話と儀礼との関係に焦点を絞り、その方法として、説話群の機能についての検討・儀礼に対する説話群の関係についての考察・由来譚と聖地及び儀礼との相関関係の分析・儀礼と説話との相関関係の総合的な検討の四つを提示している。また、丸山顕徳「八俣大蛇型説話の原風景」（『日本文学の原風景』一九九二年）も説話と儀礼との結びつきを示したものである。一方、古橋「神謡・神話・祭祀」（『奄美沖縄民間文芸研究』七号　一九八四年六月）は神話・神謡という言語表現の独自性に注目し、必ずしも神話が祭祀と対応するわけでなく、話型の要求する表現があるとする。

なお、山下は「南島民間説話研究の展望」（『口承文芸研究』一一号　一九八八年三月）・「南島における民間説話の様態」（『昔話伝説研究』一六号　一九九一年七月）などで民間説話のジャンルにのみ拘泥することなく、話の生成の場・機能などに焦点を当てることを主張している。民間説話の現代性を重んじようとする提言である。

（三）

伝説については、岩瀬が多くの発言をしている。「南島の祭儀と伝説」（『日本民俗学大系　言語伝承』一九八七年）は沖縄宮古島のンナフカ祭祀由来伝承・漲水御嶽伝承などを取り上げ、これらが祭儀の周辺で伝承されるものであったとし、伝説というべきものとした。なお、福田「民間神話の伝承世界」はこれらを祭儀周辺の神話として民間神話に含め、やや観点を異にする。また岩瀬「口承文芸

（日本）における説話と伝承者」（『説話と伝承者』一九八九年）は日本全体の伝説について扱い、その担い手を、伝説発生の原初的段階の人々・伝承的心意を話型として説話化して伝播に携わった人々・伝説的想像力を基盤に持ち続けつつ話型化されたいわれとして伝承した人々の三種に分けてその担い手の変遷を論じたものである。このなかで南島の伝説にも深く関わって述べている。南島の民間説話がその発生段階をうかがわせるからである。そして、伝説はハレとケに及ぶことでその豊穣性を獲得したとしている。ここに岩瀬が先の伝承を伝説として規定しようとする観点がうかがわれるのである。遠藤「沖縄の口承文芸における伝説の位置」（『口承文芸研究』一二号　一九八九年三月）の粟国島での事例を検討し、その伝承意識を問題にすることにより、島の特定の家・地名に結びついているからといって、その話が必ずしも真実なるものと認められているのではない、また語り手が話術として土地に結びつけて語ったものではないか、という。民間説話の真実性・虚構性のあわいをみようとする論である。なお、ここからは、さらに前述の村落・島の人々の空間意識・伝承的世界の問題にも展開させることができよう。

「奄美の平家伝説」（『奄美文化を探る』一九九〇年）は、一九八七年八月に名瀬市で行われた奄美沖縄民間文芸研究会・奄美民俗談話会によるシンポジウムの記録である。奄美に色濃く伝承されている平家伝説を弓削政己（文献）・岩瀬（口承文芸）・小林敏男（歴史）の基調報告に基づいてさまざまな角度から論じている。伝説の伝播、地域での定着・伝承などが問題となった。なお、山下はこれに関連して、「悲劇の周辺」（『奄美文化を探る』一九九〇年）でノロの悲劇譚を取り上げ、境界領域に位置するノロにとって悲劇が宿命づけられていたとし、平家伝説もこれと共通する枠組みのなかで解き得ると提示する。

（四）

さて、この時期の大きな成果の一つに福田『南島説話の研究』（一九九二年）がある。一九七九年から一九九一年までの間に発表された諸論によっているが、その殆どはこの時期のものである。前述の「民間神話の伝承世界」を第一篇「南島説話の始原」として置く。第二篇「南島説話の系譜」は「兄妹婚姻譚の行方」（一九八五年初出）・「日光感精説話の重層性」（一九八二年初出）・「宿神ガタリの系譜」（一九八四年初出）からなる。南島において、しばしば祭儀と関わって、顕著に見出される伝承を本土古代・中世の説話や今日の伝説と話型・モチーフ・表現などを比較することによって、南島の民間説話の系譜を明らかにしようとする。第三篇「南島説話の展開」は「天人女房譚の始原的伝承」（一九八七年初出）・「悪神祭祀譚の伝承」（一九八一年初出）・「木の精由来譚の位相」（一九九一年初出）・「ニンブチャーの文芸」（一九八九年初出）・「念仏「仲順流れ」前後」（一九七九年初出）からなる。南島に伝播してきた民間説話や祭文が南島民俗社会のなかで多様化して伝承さ

れ、また民俗・風土によって伝承が支えられていることを明らかにする。第四篇「南島説話の比較」は「昔話「偽の花嫁」の行方」（一九九〇年初出）・「水乞型蛇聟入の古層」（一九九〇年初出）・「昔話「星女房」の行方」（一九八九年初出）からなる。南島においては濃密に伝承されるが、本土では希薄な話柄を、主として近隣の国々の民間説話と比較することによって、民俗社会に伝播し受容されて伝承されてゆく際の伝承心意・位相を明らかにしようとする。この書の副タイトルとして「日本昔話の原風景」とあるように、南島の民間説話の姿のなかに日本の昔話の原風景をみようとするのである。そのために、時間・空間を軸として、本土の中世を中心とする記載化された説話・今日に伝承される本土の民間説話・近隣諸国に伝承されている民間説話のそれぞれとの比較が行われる。その際、比較対象を求めて、話型・モチーフが手がかりとされるのである。民間説話の歴史性・伝承性を重んじようとするもので、この方法による大きな一つの到達点であって、南島の民間説話について広い視野からの文化的位置づけがなされたものといえよう。

このような他世界の説話との比較という方法によってなされた研究もいくつかあげられよう。

南島の民間説話と本土の説話とを主として比較・検討したものには、次のようなものがある。大島建彦「火の雨の伝承」（『奄美沖縄民間文芸研究』第十号　一九八七年八月）は八重山波照間島・与那国島の火の雨伝承を取り上げ、本土にも数多くの事例をもつ説話であることを明らかにしている。そして、火の雨による滅亡の伝承は民間の神話として根強く伝えられてきたのではないかとする。岩瀬「「昔話「山神と童子」試論」（『琉球文化と祭祀』一九八七年）は南島に色濃く伝承され、本土にもある程度伝承されている「山神と童子」を選び、それらを比較し、さらには中国のものと比較することによって、その伝播の道筋を見きわめ、南島には古い時代の受容・変容に加え、新しい時代に中国よりの直接的受容・変容が行われたことを想定する。また、真下「宮古島ンナフカ祭祀由来伝承をめぐって」（『奄美沖縄民間文芸研究』六号　一九八三年一一月）・同「南島の鱣女房譚」（『昔話の地域性』一九八四年）は南島に二つのタイプとして色濃く伝承され、本土では現在伝承が希薄な、鱣との婚姻を語る説話の源流を本土の近世の艶笑譚的説話に求め、南島への伝播・変容とその心意を論じたものである。

松浪「御伽草子『七夕』と昔話」（『大阪青山短大国文』三号　一九八七年二月）は本土の記載化された物語「御伽草子」を中心とする研究であるが、そのなかで南島においていくつかみられる幸福転生型「蛇聟入」を本土の昔話にも見出し、その物語の素材として論じている。また、同「南島の呪的逃走譚」（『大阪青山短大国文』六号　一九九〇年二月）は、南島の民間説話が本土の昔話に比べ、ヨーロッパの昔話と類似することから、厄難克服譚を呪的逃走というヨーロッパ的な座標軸から検討するとし、本土の昔話に比べて、話柄の拡がり・分布の薄さを指摘する。

民間説話のなかで妖怪譚も民俗社会の心意を考える大きな手がか

りとなる。新城真恵「沖縄の河童か？」（『昔話と世間話』一九八五年）は沖縄地方の妖怪を整理し、その分布を示している。また、原田信之「南島の妖怪」（『奄美沖縄民間文芸研究』一三号　一九九〇年七月）・「竹富島のマジューヌ」（『奄美沖縄民間文芸研究』一五号　一九九二年七月）・「沖縄久米島の『マー』と『カーボーザー』」（『南島研究』三三号　一九九二年一二月）は本土の九州のガラッパを比較の対象の一つとしつつ、村落・島単位において妖怪とその伝承心意を考えるべきことを説く。

近隣諸国との民間説話の比較研究も重要な方法の一つである。伊藤清司「昔話　継子の井戸掘りの比較研究」（『歴史公論』一一八号　一九八五年九月）は南島、とりわけ沖縄地方に色濃く伝承され、本土にもある程度伝承されている「継子の井戸掘り」を中国の説話と比較し、その源流が中国の民間説話にあったことを明らかにしている。丸山「神を騙して人を救けた男の話」（『説話と儀礼』一九八六年）は南島においても報告例の稀な説話が韓国・中国に見出されることを指摘して、新話型として認定できるのではないかとし、東アジア規模での伝承の交流を示している。また、同「沖縄における龍蛇退治型説話の分類と特色」（『昔話と子ども』一九九二年）は沖縄の龍蛇退治型説話を分類し、その多様さを提示するとともに、韓国・中国など近隣諸国の類話を掲げている。なお、これらの話については、同『沖縄の民話と他界観』（一九八三年）で他界観という点から論じられている。飯倉照平「董永型説話の伝承と沖縄の説話」（『人文学報』二一三号　一九八九年）も中国の説話を主としての比較である。松浪「南島の流れ島伝承」（『日本文学の原風景』一九九二年）も近隣諸国の説話を視野に入れたものである。

他に、倉田隆延「南島の笑話モーイ親方をめぐって」（『相模国文』一一号　一九八四年二月）は本土の笑話と比較するためにモーイ親方話を分類・整理して示している。また、安里和子「沖縄に伝わる「継子話」の種々相について」（『ゆがたい』四号　一九八四年五月）は沖縄地方の継子話を整理・分類し、考察を加えている。

以上、ここ十年にわたる南島の民間説話伝承の研究を中心とし、それに関連するものをも一部含めて、その動向を概観してみた。十分に触れ得なかったものも多い。今後さらに多くの成果が望まれよう。

（ましも・あつし／立命館大学）